

北嵯峨を歩く

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



北嵯峨 遺跡イラストマップ

京の西・嵯峨野は『枕草子』に「野は嵯峨野、さらなり」とあらわされ、多くの文学の舞台ともなった地域です。ここ嵯峨野には、よく知られている神社や寺院がたくさんあり、背景となっている自然も歴史的景観として多くの人に親しまれています。

しかし、名所・旧跡のほかに、多くの遺跡が埋もれていることはあまり知られていません。そこで、嵯峨野の北部・北嵯峨の遺跡を紹介します。

北嵯峨の歴史 地域の始まりは先土器時代（広沢池遺跡さかのぼ）に遡ります。続いて、縄文時代には遺物の発見はあるものの、明確な遺構は発見されていません。古墳時代後期に入ると次々と古墳が築造され、7世紀前半までにその数は約150基にのぼります。これらの古墳の多くは、渡来系氏族の雄である秦氏一族によって造営されたものです。嵯峨野の東南部には、前方後円墳や円墳などの大型の古墳が分布しています。北嵯峨には台

地上に中規模の円墳が多く見られ、北の山麓や丘陵地には小規模な円墳で構成される群集墳が残っており、それらの古墳は北嵯峨の風景に見事にとけ込んでいます。

平安遷都の後には、このあたりの景勝ゆえに天皇の行幸も多く、また貴族や文人に愛され、大沢池や広沢池の周辺、そして山麓には多くの別業・山荘が営まれたことが文献によっても知られています。

それでは、北嵯峨の遺跡を時代を追って、たどってみましょう。

まるやま
①円山古墳（大覚寺1号墳）



北嵯峨高校運動場の北にある円山古墳

大沢池の南、有栖川右岸の台地上にあり、嵯峨野地域では最大規模の円墳です。墳丘の大きさは直径56m・高さ11mあります。内部の構造は、南に開く両袖式の横穴石室で、巨石を用いた石室は嵯峨野では畿内でも屈指の大きさを誇る蛇塚古墳に次ぐものです。石室内には2基の石棺があり、副葬品として金環・環頭太刀・金銅製馬具・須恵器・土師器などがみつかりました。大覚寺古墳群には、このほかに入道塚古墳（2号墳）、南天塚古墳（3号墳・消滅）、狐塚古墳（4号墳）があります。

②嵯峨七ツ塚



水田の中に点在する嵯峨七ツ塚

大覚寺の東側に広がる水田のなかに、直径10～20mの中規模の古墳6基が残存しています。耕作によって原形を失っていますが、いずれも円墳と考えられます。ここより北の丘陵地には、直径10m前後の小円墳からなる朝原山・

長刀坂・山越古墳群などの群集墳が分布しています。

③嵯峨院跡（大覚寺）



嵯峨院所庭園遺構の名古曾滝と遣水

嵯峨天皇の親王時代の山荘として造営され、即位後は離宮として利用されました。元慶3年（879）恒寂法親王を開山とし、大覚寺として整えられました。徳治3年（1308）には後宇多上皇の嵯峨御所となり、院政の舞台となったところでもあります。境内の北東部にある名古曾滝は、大沢池とともに、平安時代前期の庭園遺構です。境内および周辺では発掘・立会調査が実施されています。これらの調査で大沢池に蛇行して注ぎこむ遣水遺構・池状遺構・溝・土壇などが検出され、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・軒瓦などが出土しています。

④棲霞寺跡（清凉寺）



釈迦如来像をまつる本堂を仁王門から見る

左大臣源融の山荘・棲霞観のあった地で、融の没後、棲霞寺と称していましたが、天慶8年（945）

に源重明が、新堂を建立したとされています。のちに東大寺の僧裔然が宋から請来した釈迦如来立像を長和5年（1016）に釈迦堂に安置、勅許を得て五台山清凉寺と号しました。その後、嵯峨釈迦堂と呼ばれ、庶民の寺として親しまれています。また、清凉寺境内で解体修理中に採取された平安時代前期の軒瓦が、釈迦堂内に展示・公開されています。

⑤遍照寺跡



今は野に帰す遍照寺跡を広沢池から望む

広沢池の北西にある朝原山麓に立地し、花山天皇の勅願により永祚元年（989）に仁和寺の別当・寛朝僧正が開創したとされます。1991年の確認調査では池の北西岸に方形の基壇状遺構と雨落溝が残っていることが明らかになりました。この遺構は一間四面の御堂の可能性が高く、遍照寺の地上に残る唯一の遺構とみられています。また、広沢池西の立会調査でも、平安時代中期の土器類や布目瓦などが出土しています。（小檜山 一良）

現地へのアクセス

嵯峨院跡（大覚寺）／市バス28・91・93番
大覚寺行き終点
棲霞寺跡（清凉寺）／市バス大覚寺行き
嵯峨釈迦堂前下車
またはJR嵯峨嵐山駅北西へ約1km
遍照寺跡／市バス10・26・59番山越行き終点
北西へ約1km

いずれも自動車での周遊は不便です。自転車で半日、徒歩で一日かけてゆっくりと散策されることをおすすめします。